

2022年1月2日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「最初のしるし」

聖書：ヨハネによる福音書2：1～11

当時の婚宴は、特に豊かな家になると七日間も続いたという。飲めや歌えの祝宴会で、ご馳走も食べ放題であったかもしれない。どこの国でも、結婚といえば最善のもてなしをするものであろう。婚宴において「ぶどう酒がなくなる」ことは一大事なこと。マリアは、いち早くイエスにそのことを知らせるが、ここに思いがけないイエスの返事が返ってくる。《イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」》（2：4）。ここは親子の関係で見るというよりも、一人の信仰者と主イエスとの関係で見ることが大事であろう。イエスが言う《婦人よ》とは、一人の「女性」を呼んでいるのである。

マリアが婚宴のぶどう酒がなくなったその事実を知った時、すぐに声を掛けたのはイエスであった。それは、主イエスに何とかして欲しいという“祈り”とも取れる言葉。日常の一つの出来事に対する祈りである。しかしイエスの答えは、その祈りを遠ざけるかのような返答であった。私たちも日常の祈りの中で、神に聞かれていないかのような遠ざけられた経験をすることがあるかと思う。ただ、そのようにあしらわれたマリアの次の言葉に、マリアの信仰を見せられる。《この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください》（2：5）とマリアは召使たちに言ったのである。ここに、マリアの《お言葉どおりにこの身に成りますように》（ルカ 1:38）との信仰を再び見るのである。

このカナの婚礼の中で召使たちは、イエスに《水がめに水をいっぱい入れなさい》（2：7）と言われて、ただそのお言葉を信じて、水がめの《縁まで水を満した》とある。彼らは、ただ主のお言葉を信じて、水をかめいっぱいに入れた。更にイエスから《さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい》と言われ、世話役がこの水を味見した時に初めて、《このぶどう酒はどこから来たのか》（2：9）と言う。この時、イエスの「最初のしるし」を見たのは、召使たちであった。この出来事は、あの羊飼いに飼葉おけのしるし（ルカ 2:12）が示された事と重なる。

このカナの婚礼に秘められた、貧しい者への配慮、神の憐れみ、福音の奥義を教えられる思いがする。そして、傍観者であった弟子たちが、その一部始終を見て「イエスを信じた」（2：11）と最後に記されている。私たちもある意味、傍観者の一人であろう。そして私たちもこの「しるし」を見て、イエスを神の子と信じて歩む者とさせて頂きたい。（神谷）